

(講演録)

神奈川県「インドシナジュニア」の社会統合に関する調査中間報告：
「学びと励まし」のプロセスとして

佐藤峰 (横浜国立大学 都市イノベーション研究院)

sato-mine-bn@ynu.ac.jp

1. はじめに

皆さんこんにちは。横浜国立大学の佐藤峰と申します。今日はこのようなテーマでお話をさせていただくのですが、私自身、多文化共生というテーマで学术论文を書いたことは全くありません。国際協力が専門の者です。途上国の政治経済が安定して、そこに人々が暮らし続けられれば、望まない国際移動も減るのではないかと思います。国際協力と国際交流(多文化共生)という分野は別のこととして成り立っているのですが、実は繋がっていると考えています。全体像において役割が違うだけという立場です。

何故この私がここに立ってお話ししているかということなのですが、本当に偶然のことです。2017年の4月から横浜国立大学には都市科学部という学部ができますが、その学部を作る準備作業で、外部組織にヒアリングをするという作業がありました。国連機関で働いたことがあるというだけ理由で、国際組織からヒアリングをするように仰せつかりました、試行錯誤して色々な方に御協力いただいたその中に、UNHCRがありました。そのヒアリングの終わりに、ご協力いただいた職員の方から、「横浜国立大学で、難民の背景を持つ方の奨学金付きの受験枠を作ること検討していただけないか」ということを依頼されました。担当理事に連絡を取りましたら、「この質問は答えられなかったら話が先に進まないよ」という質問がありました。「奨学金該当者になる方々の現状は、概ねどのようなものなのですか?」、「時間が経過しているのに、支援が必要でしょうか?」、「移民と難民で、そんなに状況が違うのでしょうか?」、「出身国や性別などで状況がかわるのでしょうか?」の4つです。もちろん、全く答えられませんでした。

そこで専門外なりに、色々調べていきました。意外だったのは、予想以上に子供・若者・外国人というカテゴリーで政府や行政や大学は調査などの取り組みをしていることでした。横浜国大にも専門家の方はいらっしゃるし、関連の先行研究ありました。しかし、4つの問いに答えてくれる調査研究はありませんでした。

そこで、調査をしてみたらどうなのかと思いましたが、最初から問題が山積していました。まず、調査を設計すること自体が難しかったです。まず、インドシナ難民の方やそのご家族、特に該当する年齢の方々がどこにいるか。あるいは、そのことを誰が知っ

ているか、全く見当がつかないわけです。そこで無謀にも、そういう背景の方々がいらっしやるであろう、中学校や小学校に電話をかけたのですが、怪しい者扱いでした。当たり前のことですが……。なので、教育委員会と繋がりがある先生に、「怪しい者扱いされるので、教育委員会に通していただけませんか。」と図々しくもお願いしてみたら、「それは時間かかるよ。下手すると1年ぐらいかかるんじゃない？ 保護者の方々の許可を取るのは大変だよ。正直、学校の先生をこれ以上くたびれさせてあげないでほしい」と言われたんですね。この路線は難しそうでした。

その次に、地域の関連NGOの方々にお話を聞いてみました。そこから浮かび上がるのは、「調査疲れ・拒否」の問題でした。とある地域は特に、調査、マスコミというのが過剰に入ってきており、何とというか、もう話すことも嫌だし、話すなら、1時間でクオカード幾らから、というような状況になっているようでした。

はじめにお話があったUNHCRの方からも、「例えば、こういう質問票を」というリクエストもありました。調査としては網羅的な内容でした。しかし、質問票の枚数も多く、日本語が母国語でなければ、回答が難しいような日本語でした。

こんな風に色々と考えていくと、厳密な社会調査は決してできないし、内容的にも、きっと、私が直接調査することはできないわけで、もうやめようかなと思いました。

そのときに、ふと思い出した方が2人いました。一人が、私が青年海外協力隊の隊員として、中米のニカラグアという国にいた際の親友です。彼女は米国に定住し、平和部隊の隊員として来ていたインドシナ難民1.5世の方でした。タイの難民キャンプにいた際に、ボランティアの女性に親切にしてもらったことが原体験にあり、今度はアメリカ人として、国際協力をしていると話してくれました。地域によく溶け込んでいました。

もう一人は、私がサンフランシスコの大学院で博士を取ったときの博士論文の指導教官です。コンゴからの政治難民の方でした。青年期にシカゴに渡り、奨学金を取りながら博士号を取られた方です。アル・ゴアが副大統領時代には、環境課題について助言をしたこともあるそうです。私はJICAの専門家としてニカラグアで働きながら、博士論文の執筆をしていましたが、その指導にニカラグアまでわざわざ来てくれるような、優しい先生でした。ちょうど1年前に、久しぶりにその先生に会いました。調査について、やろうかやらないか迷っていると相談しました。「日本社会が違うように見えるかもしれないからやったらいいよ」と言われ、やれる範囲でやってみることにしました。

2. 調査から「調査」へ

厳密な調査ができないならば、括弧付きの「調査」をしようと思い、3つのことを心がけようと思いました。1つが、学生がなるべく関わられるよう、つまり教育効果が出る

ようにしようと思いました。そこで、本学の地域実践教育研究センターに「移民・難民コミュニティと日本社会」という全学ゼミを立ち上げて、有志の学生を募集しました。4人の留学生と、3人の日本人の学生が集まってくれました。

2つ目が、調査にご協力いただく関連団体の方々にも、何が得ることがあるといいなと。ご自身が関わった活動に来ていた「卒業生」との再会の機会になり、対象者に普段聞けないことを「調査」という「仕立て」を活用して聞いてもらえるようにできればと思ひ、質問票は必要最小限にして、雑談重視にしました。

3つ目が、調査に協力してくださる方々も、励まされるデザインにしよう。社会調査というと、「困っていることや不足」を聞いてしまいがちですが、そうでなく、「よかったことや将来の夢」を聞けるように、質問を設計しました。

3. 調査方法など

ここから調査概要に入らせていただきます。まず、調査の目的です。「神奈川県における「インドシナジュニア」の社会統合の実態を理解し、阻害・促進要因を割り出し、政策提言につなげていくこと」としました。「インドシナジュニア」は、「インドシナ難民」を親に持つ、概ね日本生まれの子弟で、概ね10-20代の方々のことです。「難民二世三世」と呼ばないのは、当事者が親から事情を知らされていない場合もあるし、知らされていてもそのような意識がない場合もあるし、何より難民という言葉の響きあまりよくないと思われるからです。（避難民が短縮されて難民となったと言われますが。）「社会統合」は少数者が差別を受けることなく、権利と責任を持ち社会参加できる状態とします。

調査方法は、個人・グループ・親子へのアンケートおよびインタビューとその分析（定量・定性分析）としました。定量分析については、本日はヨルダン出張で来ていらっしゃいませんが、本学の国際社会科学府の小林誉明准教授にご協力いただきました。質問事項は、英国内務省が発表した「社会統合の指標」を参考に、10項目（就労、住居、教育、健康、社会的橋渡し、社会的きずな、社会的むすびつき、言語的文化的知識、安心・安全、権利・市民権）に関連する質問にしました。また、調査のノウハウやスタイルですが、笹川平和財団の先行調査に依拠させていただきました。調査を担当された岡本主任研究員に様々ご教示いただき、横国まで来て全学ゼミでお話いただきました。今日も会場に来て下さいました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

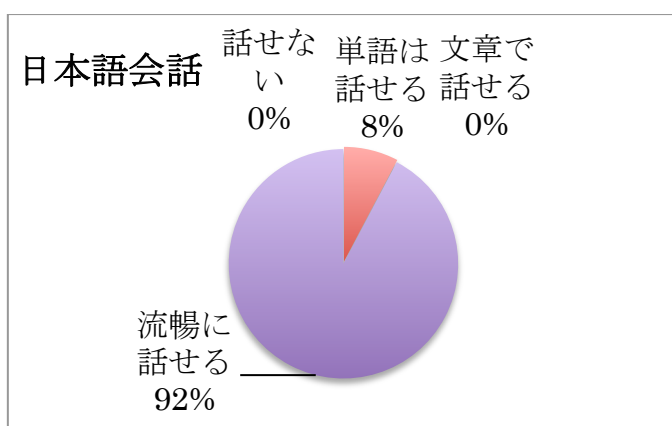
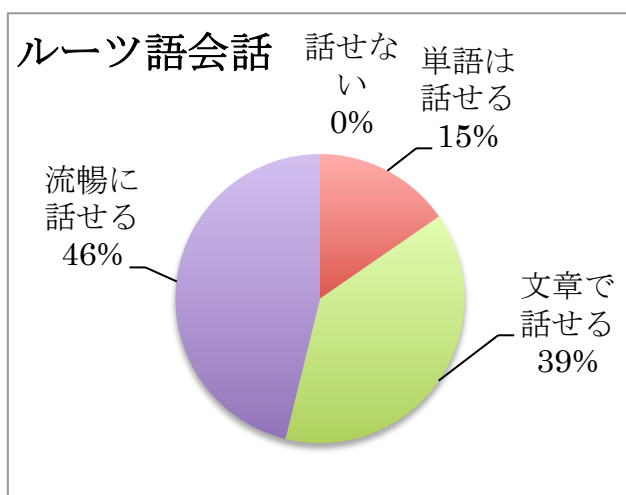
また今回の調査は信頼関係に基づくものですので、3つの非営利団体（多文化共生教育ネットワークかながわ（インドシナジュニアへのインタビュー）、特定非営利活動法人日本語・教科学習支援ネット（インドシナ1世およびジュニアの親子へのインタビュ

一)、任意団体多文化まちづくり工房（インドシナジュニア&同世代の外国に繋がるジュニアへのインタビュー）にお願いしました¹。調査期間は、2016年8月から12月となります。1) 20名のインドシナジュニアの方々、2) 5名のインドシナ難民（一世）の方々、3) 12名のインドシナジュニアでない外国に繋がる同世代の方々、にお話を伺っていただくことができました。

4. 調査結果概要

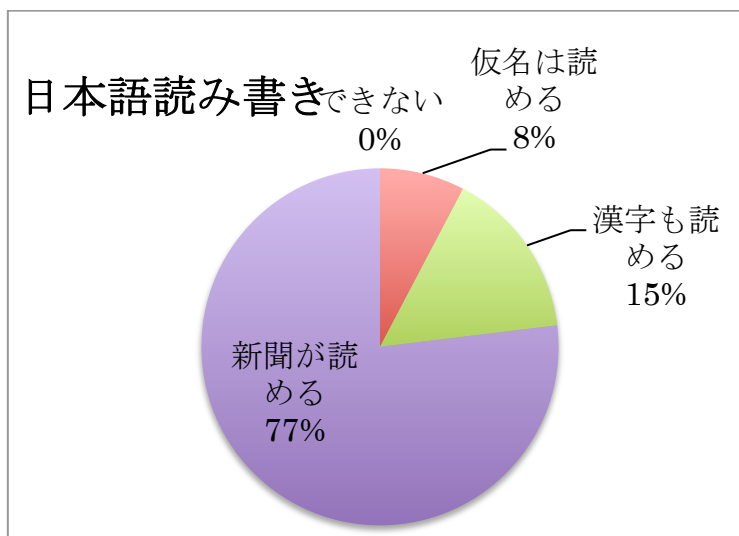
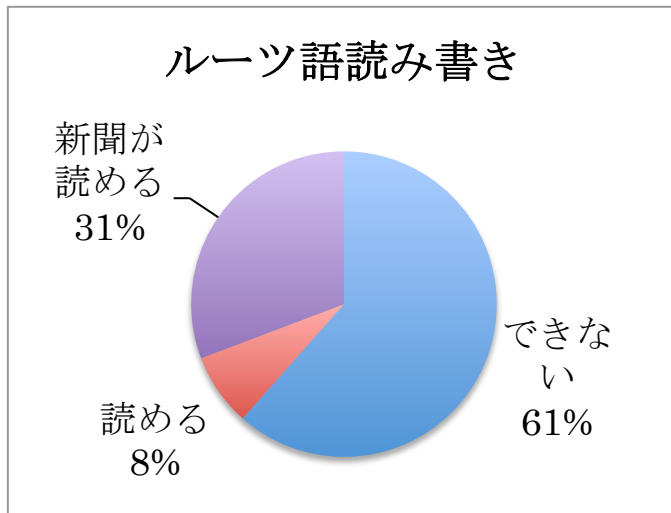
4-1 アンケート結果

今回は、1)の方々について駆け足でご報告します。まずアンケートの結果です。「言語習得の傾向」ですが、日本語を流暢に使いこなせるユースが大半である一方で、ルーツ語については半数以上が流暢に使えてないという自己認識を持っているようです：



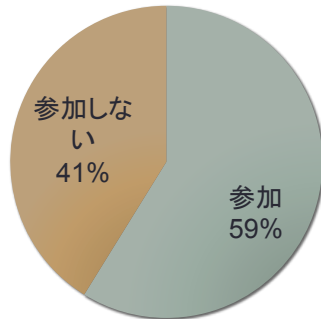
¹ 1)の調査には上智大学短期大学、横内プロジェクト（学習教室）、大島団地学習教室、さがみはら国際交流ラウンジ、ルークチン（レストラン）の方々にもご協力いただきました。3)に対しては、東京外国語大学および国際基督教大学の教員や学生の方々も協力して下さいました。お礼を申し上げます。

読み書きについてはさらに、日本語は読み書きができるのに比しては、ルーツ語の読み書きが全くできないユースが20人中6割、60%以上を超えました：

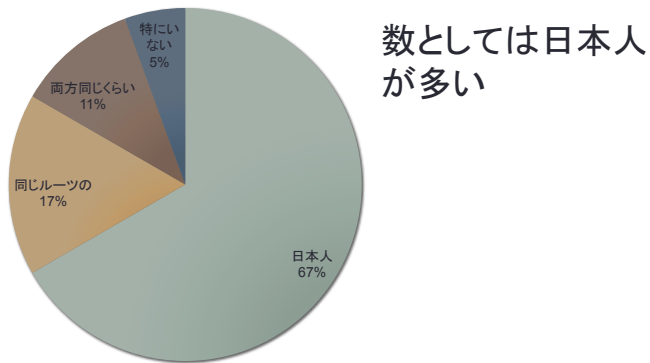


さらに、行事への参加というのも予想したより多くなくて、40%、4割が参加しないと答えられていたし、「日本人の友達が一番多い」というふうに答えられていて、困ったときに頼るのは、家族か友人か支援者の方々だよという回答でした。生活への満足度では、困ったときに頼れる人がいない、友達がいないと回答した方が、生活の満足度が比較的低いということがわかりました：

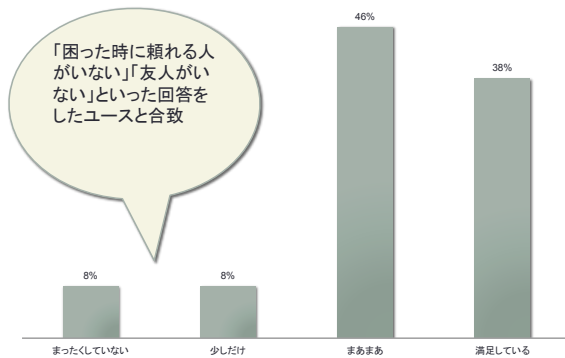
ルーツに繋がる行事への参加の傾向



一番多い友人の傾向



今の生活への満足度に関する頻度



4-2. インタビュー結果

次に、インタビュー（定性調査）です。以下の5つのテーマについて質問をしました：

1. 文化とことば

- あなたが参加するルーツ国に関係するイベントは何ですか。また、そこに参加する理由はなんでしょうか。
- ルーツが日本以外の国にもあることで、得をしているあるいは損をしていると思う経験があれば教えて下さい。

2. 悩みと対応

- 日本で暮らす中で、学校での学び、職場での仕事、地域での暮らしなどで、どんな困難なことや悩みを持ったことがありますか。
- その際に、誰に助けを求めましたか。悩みはどのくらい解決しましたか。

3. 社会からの受け入れ

- 日本で暮らす中で、両親も日本生まれ日本育ちの同世代の友人と同じように、社会から受け入れられているなど思える経験について教えて下さい。
- 逆に社会からあまり受け入れられていない、と思うことを教えて下さい。

4. 親子での経験

- 親子での経験を振り返り違う点、日本は変わったと思うことを教えて下さい。
- 逆に時がたっても同じ点、日本は変わらないな、と思うことを教えて下さい。

5. 将来展望・日本社会へのリクエスト

- 今現在持っている夢や目標について教えて下さい。
- こういう日本社会になってほしいという展望があれば教えて下さい。

様々な回答をいただきましたが、複数回答があったものを中心にお話します。

まず、「1. 文化とことば：「ルーツ国（繋がりがあある国）」があることでよかったこと」については、以下のような発言がありました：

- 文化の衝突を日常的に考えることができた。別の文化に当たった時に乗り越えることが難しい人があるけれど、自分は大丈夫。
- 大多数の人は日本にルーツを持つが、自分は違うから、小さいときから、そういうことに関して、何だろうなどと考える機会が多かったこと。
- 向こうに住んだことがあるから、今の日本の生活が当たり前じゃないということがわかる。感謝の気持ちが違うと思います。
- 2つの文化を持っていること。日本の人にX国を知ってもらえる。
- 外国人って言うときすごいっていわれてちょっと自慢。

- 見かけが違うため、すぐ覚えてもらえる。就職などで有利だった。
- ビジネス面でY国に進出する会社も多く、チャンスだと思う。
- Zという故郷があると、日本とは違うのんびりした環境でリラックスできる。
- 毎年お祭りに参加でき、離れている人と会える場所があるのがいい。

印象的なのは、肯定的な意見が多いことです。2つの文化に挟まれて育つというのは、それなりに大変なことではあるけれども、成長の機会としてとらえられているということが（あるいは、多少無理をしていますが、そのように調査者に語っていることが）わかりました。また、「途上国にも暮らしたので、日本の暮らしというのがすごい、本当に考えられないぐらい感謝ができることだ」というようなことをおっしゃっているような方々の回答も、印象的でした。

「2. 悩みと対応」では、以下のような語りが目立ちました。（→以降はどう対応したかについてなどです）：

- 名前でからかわれたり、遠くから外人と呼ばれた。→言い返す／通称名にかえる／進学とともに緩和。
- 日本語や勉強が出来ないといじめられた。→できるようになると解消
- 小中高と上がり、いちよう小学校地域は特別なところだと分かって、高校でルーツをオープンにできなかった。→最初に言えば楽だった。
- いちよう団地を出たら外人扱いされ悩んだ→帰れる場所と友達がいるので自信を持っていいと自信をもちはじめたら日本人の友だちができた
- 帰化しても、市役所でも税務関係、保健関係には配属できないと言われ、意欲がなくなった。→人権集会で発言。問題提起し解決へ。
- 日本人として生きているのに、ルーツに焦点を当てられるの嫌。→日本人以外とはなるべく付き合わず、国際教室にもいかなかった。
- バイトの面接を申し込もうと、5分以上日本語で話していたのに、名前を言ったら「日本語話せますか？」と言われた。→自分から断った。
- 入試に関わると特にお母さんとの間にことばの壁が。説明が大変／両親が色々干渉してくる／日本の良さを理解しない両親との間に文化の壁
- 両親の代わりに自治会費の集金をしたり、通訳したり。免許更新にもついていく。自分だけでなく弟の学校の書類を書いていた。頼らせすぎた。

目で追うだけで、大変だなあと思わざるを得ないのですが……。傾向だけ申し上げますと、家庭外の問題のほうが数的には圧倒的に多いけれども対応策が割とある。他方

で、家庭内とか親族内の問題のほうが何かちょっと行き場がなさそうというか、解決策が見出しにくそうで、かなり背負ってるんだなというのが印象です。

「3. 社会からの受け入れ（肯定的経験）」については、「どういうときに社会から受け入れられていると思うか」というところでは、特別に配慮されることよりも、同等の扱いを受けていると思えたときを肯定的な経験と見ている事例のほうがはるかに多かったです：

- 仕事を（日本人と同等に）任されている。
- 日本で生まれたので、見た目は外国人だが、日本籍だし日本人と同じように受け入れられている。日本人と変わらないと思う。
- 友達全員日本人だし、（日本人の）彼氏もいる。
- 日本人としてやってきたので、同等に厳しくやってもらえたこと。
- 日本語の先生が、自分の結婚式に海外から帰国して出席してくれた。
- 職場では受け入れられている。お客様も「外人だっていいじゃないの」と言ってくれる。
- 主人（日本人）の両親が自分を受け入れてくれたのがうれしい。
- この地域の人は寛容っていうか、（外国人も多いし）国が違ってても驚かないので、楽です。
- 中卒でも仕事がありました。面接も友達が手伝ってくれました。
- 先生も授業で、「ルーツ国」の挨拶とか衣装とかを取り入れてくれた。

逆に、「3. 社会からの受け入れ（否定的経験）」つまり「受け入れられていない経験」というところでは、以下のような回答を得ました：

- メディアに偏りがある。アジア人にもう少しやさしくしてほしい。
- 母は日本語が分からず、集会に来ないでいいと言われる。
- 「ルーツ国」が日本でほとんど知られていない。
- 外国籍だと公務員になれない。組合に入れず、ボーナス八割。外国人の派遣社員を「外注（害虫）」と読んでいる。
- 選挙権もパスポートもないこと。日本で生まれても無国籍。
- 日本語がわからないと受け入れられない。
- それは日本人が考えることでは？
- 違いに悩んだくらい。あとは、殆ど無い（8件）

これもやはり傾向がありまして、人から受ける属人的な差別の体験というよりも、メ

ディアが変わらないとか、制度、国籍の問題とかいうことがつくり出す差別のほうが、数が圧倒的に多いということと、言葉の壁はやはり大きいのだなということがわかりました。また、意外にも、「ほとんどない」と答えられた方々が8人いたのですが、これはもしかしたら調査バイアスなのかもしれないです。あるいは、かかわられている方々が非常にポジティブにかかわっておられる成果かもしれません。解釈が分かれるところだと思います。

「4. 親子での経験」ですが、ここはすごく変化したところと、時間が経過してもまったく変化がないところがあります。親と違う点では以下のような語りがありました：

- 言語：親は日本語がわからないので、住んでいる団地を出ると何もわからなくなる。私は日本語の方が得意なくらい。
- 家計：親たちはとても苦労した。ジュース1本飲むのにお金のことを考えて買えなかったことがあるような生活。
- 興味：外国を知っている・興味がある人が増えた。外国人も増えた。ハーフが注目されていて、逆にかっこいいとされてきた。
- サービス：多言語での情報提供が多くなった。学校でも通訳がつく。
- 属性：難民ということで随分と助けられたと親は言っている。

日本語は親よりすごくできる。みんなそういうふう言ってるんですね。経済状態も、親たちはジュース1本買うことを迷うというところから比べると、自分たちは、比較的恵まれた暮らしが送れていると実感しています。他方で、親たちの世代は難民というところで社会に随分助けられたけど、自分たちは余りそういう感じはしない。しかし、外国人ということでは、言語サービスなど外国人向けサービスも非常に多くなったし、実際、外国人もふえてきて、外国を知っているとかいう、興味があるという人がふえてきた、と。

他方で、「4. 親子での経験（親と変わらない点）」、つまり時間が経過しても変わらないこともたくさんあるようです。主に言葉と制度の壁のようです：

- 私達は同じ税金払っているのに、書類の手続きが多すぎる。いまだに助けてもらわないと書けない。
- （経済的に）大学に行きにくいのはあまり変わらない。
- 外国語で話していると振り返られるのは変わらない
- ハーフでも注目されるのは、色が白い・白人系であるのは変わらない。
- お母さんの日本語と私のベトナム語（第二言語レベル）は一緒。

- 日本語が出来ないと暮らしが大変なのは変わらない。

次に、「5. 将来展望・日本社会へのリクエスト」の「将来の夢」です。録音していただいた語りを聞いていて感動したのですが、非常に何か、日本人の若者よりもビジョンが明確だなというふうに思いました：

- 人同士が混ざった所で共存できるということ、自分が経験として分かっている。国際関係を知りたい、学びたい。
- ルーツに誇りを持っている。自信を持たない子供たちがいるので、そういう子ども達を支援する立場になりたい。
- 中卒なので高校に行きたい。
- 2つの国の架け橋になりたい。
- 食を通じて、ルーツを伝えたい。
- 自分のお店を持ちたい。子どもには（日本から殆ど知られていないので）ルーツに関わることをしてほしい
- 親とは違って日本語を使う仕事がしたい。まだ何かはわからない
- 自分は日本籍だし、普通に生きていければ良い。

最後に、「日本社会へのリクエスト」です。「もっとこんなことをしてほしい」というようなことではなくて、「同等に見てほしい」というリクエストが過半数であることがわかりました。「日本のためにも日本人や社会がもっと開かれてほしい」というリクエストもありました。かなり深い回答が多くて、こちらが励まされる気持ちでした：

- 各国語でのサインを増やしてほしい。
- 国籍に関係なく、人として付き合えるような世になってほしい。
- 「かわいそう」でなく、同じ人間として、人材とみてほしい。
- ルーツ（どこからきたか）でなく、ルート（何をしてきたか）で見てほしい。
- 憲法でも何でも「国民は」から始まる。なんとかならないか。
- 視野を広くしてほしい。海外を知ってもらえばわかる。教育が大事。
- 外国に比べて難民を助けてくれていると思う。自分の目線からという、こっちが適応しようという姿勢が必要。
- ぼくらはぼくらで日本人に要望するだけでなく、僕らの文化を押し付けるんじゃないくて・反対するだけでなく、Awayにいる以上、日本の文化になれなきゃいけない。両者がお互いのことを考えて生きていかなきゃならない。
- 外国人が入ってくるからとは言っても、昔ながらのものを残して欲しい。

5. 終わりに：調査から垣間見えたこと

最後に、今回の調査から見えたことについて、簡単に総括させていただきます。まず、アンケートとインタビューの双方から理解されるのは、インドシナジュニアの方々は、言語文化的にも人間関係的にも、日本社会へのアイデンティティのほうが強いということがよくわかります。ルーツ国の「母語」や「文化」の希薄化は問題かもしれません。

インタビューのカテゴリーをクロスカッティングに比較しつつ、今回ご紹介していない調査対象者の語りとも比較すると、以下がぼんやりと示唆されると思われます。まず、ジェンダーですが、男性の方が傾向として経験が過酷で、女性のほうが割にうまく対応しているようです。また、年齢が若いほうが差別経験の語りが少ないという印象を受けます。日本社会も少しは国際化しているということでしょうか。次が、「マイノリティのマイノリティ」の課題です。例えば、ベトナムという国であれば、比較的日本で知られていますが、ラオスという国になると知らない。ラオスからの出身の方は数も少ないということもあって、ベトナムのコミュニティに比べて外国人扱いされているのではないかと、支援も受けにくいのではないかとというような語りが複数ありました。

移民と難民ということでは、制度ということ以外に大きな差は私の見た限りでは見られず、逆に、ニューカマーの移民の方が、当たり前ですが、暮らしや経験が大変そうでした。親子の比較では、親子の経験や言語能力の格差が大きく、「お母さんが年を取って高齢者施設に入るといときに、誰が通訳をしてくれるんだ」あるいは「子供が自分の母語を十分に話せず、自分は日本語を十分に話せず、意思疎通が難しい」というような、切実な悩みも見えてきました。次が、制度です。やはり今も昔も、若干変わっていても複雑なので一人ではできない。ここは非常に働きかけが必要であろうと思います。

もう1つが、これは今回のような調査全部にいえることですが、大規模な社会調査におけるカテゴリーの課題です。例えば、日本政府は内閣府を中心に、青少年に関して多数の調査をしています。しかし、現在の調査票は日本生まれ日本育ちを暗黙の了解としているようで、外国籍や外国に繋がる青少年がいても、チェック項目がない調査票になっている場合が殆どです。それが改められるだけで、門外漢の私がここでお話しする必要もないほどの情報が得られ、提言に繋がるはずですが。

更に、これは完全な私見ですが、今回のような課題を政策提言につなげ社会を動かすには、多文化共生とか難民支援ということをされている方も外国人の方々の母数というのがやはり日本社会で非常に少ないので、戦略的に動く方が効果的と感じます。例えば「多様性」や「社会的包摂」ということで、「障がい」や「高齢者」など、共通利害を持てる分野の方々と連携して政府なりに働きかけていくほうが、事が動くのではないかとこののを、今回この調査をしながら思ったことです。

そして最後に、今回インタビューに応じていただいた方々を、単なる福祉や支援の対象として見るのは間違いだということです。これは国際協力の分野で繰り返されてきた失敗でもあります。今回インタビューに応じてくださった方々は、生きる力が強い、ガッツがある人たちではないかと。ポテンシャルを秘めている「人材」、今風に言うと「グローバル人材」ということでしょうか。こういう方々に、もっと日本の国際協力の未来を担っていただけたらな、協力隊隊員になっていただけたらなと思います。彼・彼女らが日本生まれ日本育ちの青年と同等の教育などの機会を得て、より社会で活躍しやすくなれば、日本社会はもっと楽しくなる、今よりも風通しがいい社会ができるでしょう。

以上が、雑駁ですが、私からの報告になります。ご静聴ありがとうございました。

(情報は2017年3月当初のものです。ご協力いただきました皆様、感謝いたします。)

参考資料 (アクセスしやすいウェブに掲載されているものを抜粋しました) :

<http://www8.cao.go.jp/souki/index.html>

<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/life/h27/gaiyou.html#mokuteki>

http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/junior/pdf_index.html

http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf_index.html

http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/shiensya/h25/pdf_index.html

http://www.mext.go.jp/a_menu/01_f.htm

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/local/symbiosis/index.html>

<http://www.soumu.go.jp/kokusai/index.html>

http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri09_00030.html

http://www.moj.go.jp/shingikaikako_sonotakaigil.html

<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/gaikokujin/index.html>

https://www.spf.org/projects/project_8851.html

https://www.spf.org/projects/project_7919.html

<http://www.unhcr.or.jp/html/agdm.html>